プレスリリース

2026 年 11 月 17 日
農　研　機　構

極多収で機械化栽培に適した
サツマイモ新品種「ゆめほくと」を開発

農研機構は、極多収で機械化栽培にも適したサツマイモ（かんしょ）の新品種「ゆめほくと」を開発しました。

「ゆめほくと」は、鮮やかな黄色の肉色とホクホクした食感を有し、青果用・菓子等の加工用の両市場に対応可能です。関東地域を中心に全国の産地向けで、寒冷地での栽培にも適しています。また、苗の生産性、極多収性、病害虫抵抗性、冬季間の貯蔵性[1)]にも優れます。これらの特徴を持つ「ゆめほくと」は、生産現場の省力化と収益性向上を支え、多様化する消費者・実需者ニーズに貢献するサツマイモ品種として普及が期待されます。

近年、サツマイモは焼きいもや菓子加工向け需要の拡大に加え、海外への輸出も増加しており、国内外で重要性が高まっています。一方で、生産現場では高齢化や人手不足が進み、省力化と収益性向上を両立できる新たな生産体系の構築が求められています。また、基腐病をはじめとする病害虫の発生や気候変動による栽培環境の変化など、生産の安定性を脅かす課題も顕在化しています。このような状況の中、今後サツマイモの産地を維持・拡大して輸出を促進するために、多収であるだけでなく、機械化栽培への適性、病害虫抵抗性、貯蔵性、加工適性などを総合的に備えた品種が求められています。

新品種「ゆめほくと」は、こうした課題の解決を目指して育成された品種です。極多収性に加え、萌芽（育苗時の種いもからの出芽）が早く、まっすぐな苗が多く採れ、機械収穫や水洗時に皮剥けが少ないといった機械化栽培への適性、優れた病害虫抵抗性、長期貯蔵性を兼ね備えており、生産現場の省力化と安定生産に貢献することが期待されます。また、北海道など冷涼な地域での栽培にも適し、鮮やかな黄色の肉色とホクホクした食感を有し、青果用だけでなく菓子加工用途にも適していることから、多様化する消費者・実需者ニーズにも対応可能です。

これらの特徴を持つ「ゆめほくと」は、生産現場の省力化と収益性向上を支え、多様化する消費者・実需者ニーズに貢献するサツマイモ品種として普及が期待されます。



写真　「ゆめほくと」の焼きいも

＜関連情報＞

予算：令和 5 年度補正予算「食料安全保障強化に向けた革新的新品種開発プロジェクト」
「スマート技術向けの特性を持つ穀物等品種の開発」、資金提供型共同研究「北海道向き良食味サツマイモ品種選定に関する共同研究」および運営費交付金

品種登録出願番号：「第 38433 号」（2026 年 2 月 27 日出願、2026 年 6 月 25 日出願公表）

問い合わせ先など

研究推進責任者：農研機構 中日本農業研究センター 所長 善林 薫
研 究 担 当 者：同 野菜畑作研究領域 カンショ育種グループ長 田口 和憲
同 北海道農業研究センター
寒地畑作研究領域 バレイショ育種グループ長 石黒 浩二
ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所
作物生産研究部 園芸作物開発課 課長 中村 匡晴
作物生産研究部 園芸作物開発課 小林 由佳
広 報 担 当 者：農研機構 中日本農業研究センター 広報チーム
https://www.naro.go.jp/laboratory/carc/inquiry/index.html

※農研機構（のうけんきこう）は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネーム（通称）です。新聞、TV 等の報道でも当機構の名称としては「農研機構」のご使用をお願い申し上げます。

開発の社会的背景

農業生産現場では生産者の高齢化や労働力不足が進行しており、サツマイモ生産においても生産者数や作付面積の減少が懸念されています。このため、多収品種の導入等による生産性向上や、経営規模拡大を可能とする移植や収穫作業の機械化栽培体系への転換が求められています。また、病害虫の発生にともなう生産リスクの低減も重要な課題となっています。

一方、サツマイモの機械化栽培を進める上では、苗の長さや太さのばらつきが大きいと機械移植の作業効率が低下することに加え、収穫機による掘り取りや選別・水洗工程において、いもが傷ついたり折損したりすることで商品価値の低下や出荷ロスが発生することが課題となっていました。さらに、北海道をはじめとする寒冷地では、生育期間が比較的短いため、限られた栽培期間内で安定して多収を実現できる品種が求められています。しかし、既存品種では収量が十分でない場合や、いもの肥大が不安定になる場合があり、安定生産が課題となっていました。このため、寒冷地でも安定して高収量を確保できる極多収性に加え、まっすぐな苗が揃いやすく機械移植に適し、いもの収穫・調製時の損傷が発生しにくいなど機械化栽培に適した特性を備え、基腐病をはじめとする病害虫への抵抗性と安定した品質のいもを確保できる新品種の開発が強く求められていました。農研機構ではこれらの課題を解決し、持続的なサツマイモ生産と産地の発展に貢献することを目的として「ゆめほくと」を開発しました。

研究の経緯

本品種の母本である「作 11136-74」の育成には、パプアニューギニアの高標高地で収集されたサツマイモ遺伝資源「P87-14」が活用されています。「P87-14」が有する低地温条件への適応性に着目し、その特性を育成系統に導入することにより初期生育の向上を図りました。その後、低温条件下での生育が優れる「作 11136-74」と菓子等加工適性が優れる「九州 186 号」を交配し、収量性、病害虫抵抗性、いもの品質、地域適応性および機械化栽培適性などについて選抜・評価を重ねました。その結果、極多収性と機械化栽培に適性を有し、基腐病をはじめとする複合病害虫抵抗性の新品種「ゆめほくと」を育成しました。

新品種「ゆめほくと」の特徴

1. 育成地（茨城県）における標準栽培[2)]での収量の 4 か年平均は 525kg/a で、「べにはるか」の 158%に達しました。また、早掘栽培[3)]においても 330kg/a（同 181%）と極多収性を示しました。さらに、無施肥・無マルチ栽培などの厳しい条件下においても旺盛な生育を示し、強健性（不良環境に強い）と極多収性を兼ね備えています（表 1）。
2. サツマイモネコブセンチュウ[4)]に対しては「やや強」の抵抗性です。また、主要病害の基腐病に対して「やや強」、つる割病に対して「やや強」の抵抗性を有する複合病害虫抵抗性です（表 1）。
3. 萌芽性が良く、苗床でのつるの伸長が早いため苗生産性[5)]が高く、機械移植に適した苗を種いも 1 個当たりから短期間で多く確保できます（図 1A, B）。これにより育苗コストの削減が可能となるほか、まっすぐな形状の良い苗が得られやすいため、採苗と植付時間の削減が期待できます。また、市販の移植機を用いた試験では、「べにはるか」と同等の高い移植成功率が確認されました（図 1A, C）。

4. 塊根の外皮が強靭であるため、機械収穫損傷率[6]は対「べにはるか」百分比で 57%に抑えられました（図 1A)。また、洗浄機による皮剥け程度は対「べにはるか」百分比で 33%と著しく少なく（図 1A,D)、収穫から調製までの機械による作業に適性を有しています。

表 1　育成地（茨城県）における収量および病害虫抵抗性

	収量	平均１個重	株あたりいも数	病害虫抵抗性					萌芽性	貯蔵性
	(kg/a)	(g)	(個)	ｻﾂﾏｲﾓﾈｺﾌﾞｾﾝﾁｭｳ	基腐病	つる割病	黒斑病	立枯病		
標準栽培（４か年平均値、2022年～2025年）										
ゆめほくと	525	225	5.9	やや強	やや強	やや強	中	やや弱	良	易
べにはるか	333	227	3.7	やや強	（弱）	中	–	中	やや良	やや易
ベニアズマ	332	273	3.1	中	（やや弱）	やや弱	–	やや強	中	難
早掘栽培（４か年平均値、2022年～2025年）										
ゆめほくと	330	152	5.5							
べにはるか	183	146	3.2							
ベニアズマ	233	184	2.9							
無施肥、無マルチ栽培（２か年平均値、2024年～2025年）										
ゆめほくと	331	411	2.3							
べにはるか	73	144	1.0							
ベニアズマ	107	244	0.8							

※サツマイモネコブセンチュウ、基腐病、つる割病、黒斑病および立枯病抵抗性は特性検定法に基づき総合判定した階級。カッコ内の抵抗性の階級は、サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和 4 年度版）より引用。

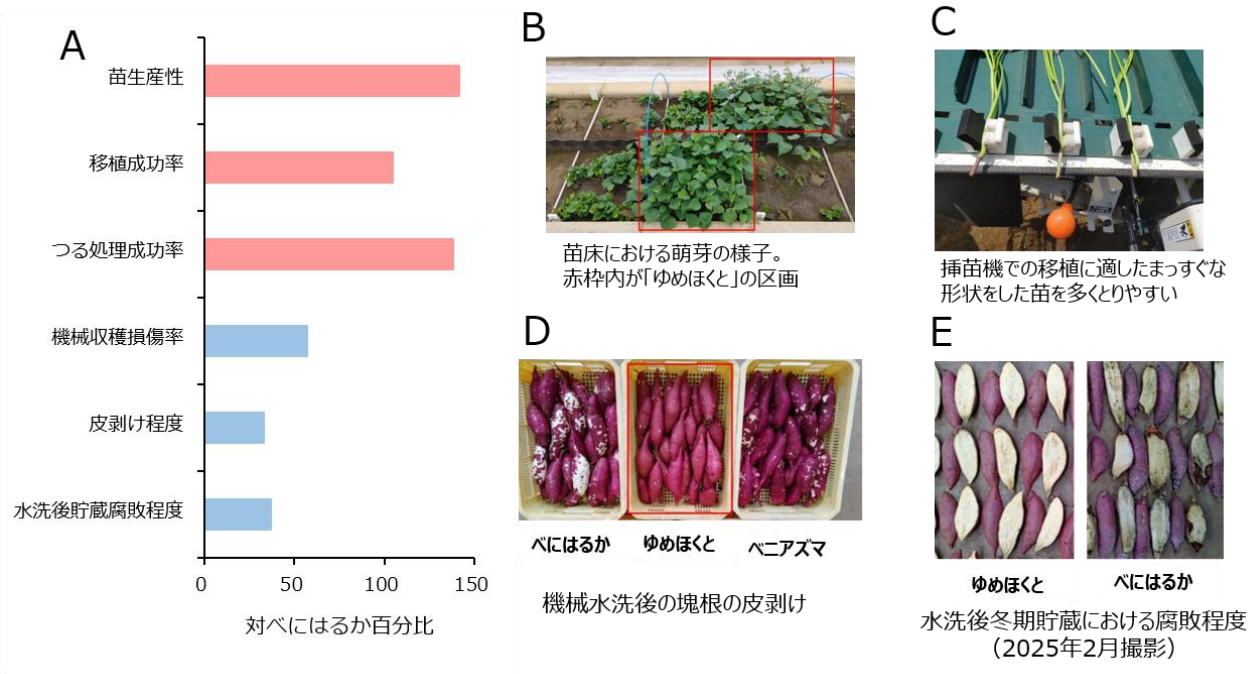


図１　「ゆめほくと」の機械化栽培に向く特性の実証試験結果（2024 年～2025 年）

実証試験は、苗生産性（30 ㎝苗の本数）は 2 試験、移植成功率は 6 試験、つる処理成功率（専用機械によるいもの分離率）は 2 試験、機械収穫損傷率は 15 試験、皮剥け程度は 5 試験、水洗後貯蔵腐敗程度は 5 試験において複数年、場所で実施した。グラフは、形質ごとの平均値から換算した値。

5. 輸出や周年流通における厳しい貯蔵条件を想定した「水洗後・冬季無加温貯蔵」において、腐敗率は主要品種である「べにはるか」の 37%に留まりました（図１A,E）。塊根の貯蔵性が優れていることから、いもの品質を長期間維持できます。

6. 北海道における複数年の栽培試験では、「ベニアズマ」対比で 135%に相当する 360kg/a の収量を示しました（図 2）。生育期間中の気温確保が難しい冷涼地域においても安定した多収性を発揮します。

7. 蒸しいもの肉色は鮮やかな黄色で、調理後の黒変が少ないことが特徴です。上品な甘味とホクホクした食感を有し、「ホクホク系焼きいも」のニーズに応えるとともに、スイートポテトなどの加工適性評価においても、現在利用されている主要品種と同等の高い評価が得られました（図 3）。

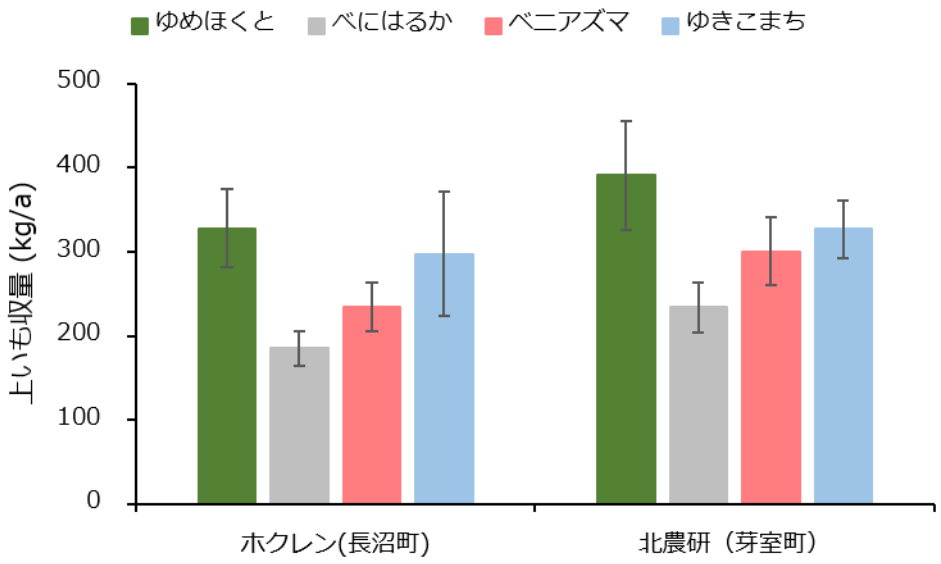


図 2　北海道における収量（2023 年～2025 年平均値、マルチ標準栽培）

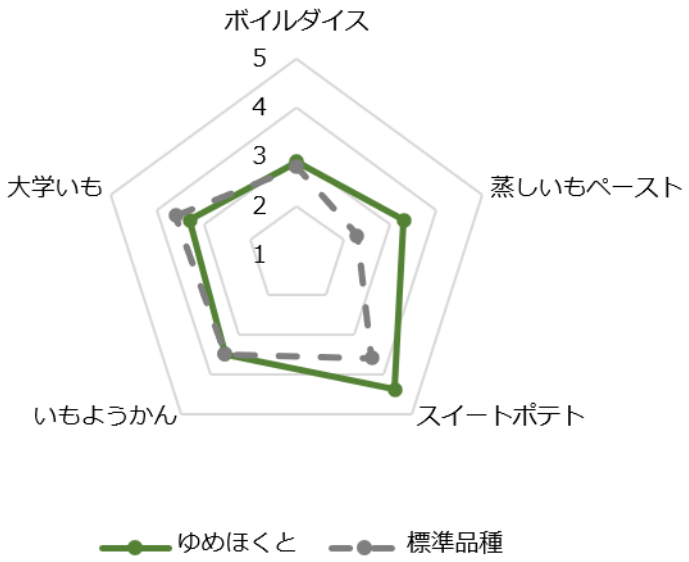


図 3　実需者による品質評価試験における総合評価（2023 年～2024 年）

注)各製品の試作品に対する評価点(総合評価)を 1(劣)～3(標準)～5(優)のランクに換算した。標準品種はボイルダイスと蒸しいもペーストが「高系 14 号」、スイートポテトが「コガネセンガン」、いもようかんが「ベニアズマ」、大学いもが「あいこまち」である。

品種の名前の由来

「ゆめほくと」という名前には、日本のサツマイモ産業の未来への願いが込められています。「ゆめ（夢)」は、人手不足や病害虫の発生など、生産現場が直面するさまざまな課題を乗り越え、省力化と安定多収生産を実現することで、産地の発展と日本の食料安全保障の強化に貢献する品種となってほしいという期待を表しています。一方、「ほくと」には二つの意味が込められています。一つは、本品種の特徴である、蒸しいもや菓子加工に適し

た上品な甘さと「ホクホク」とした食感（やや粉質）です。もう一つは、夜空で進むべき方向を示す北極星を見つけるための目印になる「北斗七星」に由来しています。本品種が備える極多収性、病害虫抵抗性、機械化適性、貯蔵性などの優れた特性を活かし、変化の大きいこれからのサツマイモ生産やスマート農業の発展を導く道しるべとなってほしいという願いが込められています。

今後の予定・期待

「ゆめほくと」は関東地域を中心に、北海道を含む全国のサツマイモ産地への普及拡大を目指します。極多収性と優れた機械化適性を生かすことで、生産現場における省力化や経営規模の拡大を支援し、生産者の収益性向上に貢献することが期待されます。また、基腐病をはじめとする複数の病害虫に対する抵抗性を備えていることから、生産の安定化や経営リスクの低減にも寄与すると考えられます。さらに、青果用として利用できるだけでなく、スイートポテトなどの菓子加工用途にも適していることから、拡大する国内需要や輸出需要への対応を通じて、国産サツマイモの安定供給と産地の国際競争力強化に貢献することが期待されます。

また、本品種は形状や大きさの揃った手のひらサイズのいもを多く生産できるため、家庭での調理にも適しています。鮮やかな黄色の肉色とホクホクした食感を生かし、天ぷらや煮物、ポタージュ、ペーストなど、近年主流となっている、しっとり・ねっとり系で焼きいもや干しいもなどのスイーツ向け利用品種とは異なる価値を持つ野菜および菓子加工用途への利用拡大が期待されます。「ゆめほくと」は、生産者、実需者、消費者の幅広いニーズに応えるとともに、極多収、機械化栽培適性、病害虫抵抗性、貯蔵性などの優れた特性を通じて、食料安全保障の強化や持続的な農業生産の実現に貢献するサツマイモ品種として、その普及が期待されます。

原種苗入手先に関するお問い合わせ（種苗会社等向け）

2026 年度産の原種苗（種いも）の入手については、以下をご参照ください。
申し込み期間 ：2027 年 1 月 20 日まで
原種苗配布 ：2027 年 3 月以降を予定(有償配布になります)
申し込み先 ： 中日本農業研究センター研究推進部 研究推進室 知的財産チーム
https://www.naro.go.jp/laboratory/carc/contents/hinshu_kyodaku/index.html
メールアドレス　chizai_team-carc@ml.affrc.go.jp

留意事項 ： 原種苗提供時に、2 つの契約を締結します。
①利用許諾契約 ： 農研機構と利用許諾団体間の契約
なお、利用許諾は、種苗の生産・販売を行う業者、地方公共団体、農林漁業者の組織する団体(農業協同組合等)等と締結します。生産者個人とは締結できません。
②原種苗提供契約 ： 農研機構中日本農業研究センターと利用許諾団体間の契約

原種苗提供可能数量に限りがあるため、お申し込みいただいても原種苗提供できない場合がございます。あらかじめご了承ください。

2027 年 10 月以降については、上記申し込み先にて随時受付をいたします（同様に提供可能数量には限りがございます)。

利用許諾契約に関するお問い合わせ

下記のメールフォームでお問い合わせください。
農研機構 HP【品種の利用許諾についてのお問い合わせ】
https://prd.form.naro.go.jp/form/pub/naro01/hinshu
なお、品種の利用については以下もご参照ください。
農研機構 HP【品種の利用許諾について】
https://www.naro.go.jp/collab/breed/breed_exploit/index.html

申込み多数により次年度以降の申込みをお願いする場合がございます。
あらかじめご了承ください。

用語の解説

1) 貯蔵性
育成地（茨城県）において、冬季間無加温の収納舎に 90 日間置いた後の腐敗いも率を調査し、腐敗いも率が「0～10 %未満」を"易"、「10～35 %未満」を"やや易"、「35～60 %未満」を"中"、「60～85 %未満」を"やや難"、「85 %以上」を"難"とする 5 段階評価で、貯蔵のしやすさを判定しています。

2) 標準栽培
栽培暦に沿った標準的な栽培法のこと。関東地域のサツマイモ標準栽培では、通常は 5 月上旬から 6 月中旬に植付けを行い、植付け後 120～150 日となる 10 月中旬から 11 月上中旬にかけて収穫します。

3) 早掘(はやぼり)栽培
関東地域のサツマイモ早掘栽培では 4 月下旬ごろから植付けを開始し、植付け後 100～120 日となる 8 月上旬から 9 月上旬にかけて収穫します。市場での価格が高い時期に早期に出荷することを目的としています。

4) サツマイモネコブセンチュウ
多くの作物の根に寄生し、根にこぶを作って作物の品質や収量を低下させる線虫（見た目が細い糸状の線形動物）です。卵や体長約 0.4 mm の幼虫の状態で土中に生息しています。線虫類は、サツマイモ栽培に被害を与えますが、被害の大きさは、品種が持つ線虫抵抗性によって差があります。

5) 苗生産性
健全な苗を安定して多く生産できる能力。萌芽やつるの伸長の早さなどが関係し、採れる苗数に反映されます。

6) 機械収穫損傷率
収穫機により掘り上げられた試験区内の全収穫いも数に対する、折損や皮剥けなどの機械的損傷を受けたいも数の割合（%）です。